

の発見が可能である。

### 230. Electronic cervimeter の開発とその応用

(群馬大) 佐藤 郁夫, 松本 清一

#### 1. 研究目的

分娩の経過を知るのに頸管の開大度を測定するということははなはだ重要なことである。しかし Electronics が進歩した今日でも、開大度を診断する際に、内診によらなければならないというのが現状である。1963年には Friedman 等によつて Electronic cervimeter 開発の報告がなされ、その後日本でも2~3の報告を見たが、今なお実現化しないのは腔内装着という特殊な条件がそうさせる訳である。このたび私どもは実用化を可能にすべく新しい Electronic cervimeters を開発した。

#### 2. 研究方法ならびに成績

私どもは train gauge の Transducer を使用して cervimeter を試作した。型は全長が約 5.5cmのコンパス型で2 cmから9 cmまで測定が可能である。器械は巾 0.5 cm, 長さ 1.5cmのU字型金属板と約5 cmの2本のギター線の二つの部分からなり、ギター線の先端には頸管装置用クリップが取り付けられている。測定原理はU字型金属板の両端に取り付けられたギター線が頸管の開大にともなつて拡がりU字型金属に起る歪みを strain gauge の Transducer が catch し、歪圧力計の meter で開大度を読むという方法である。私どもはこれを分娩が開始した妊婦の頸管に装置し、分娩経過と頸管の開大との関係を視察している。そして分娩の経過や予後を判定する。

### 231. われわれが行なっている新生児血清ビリルビン測定法— Alkaline Azobilirubin Blue 法について

(北海道大)

松田 正二, 門間 忠夫, 藤本征一郎

#### 1) 研究目的

新生児血清ビリルビンの測定に当つては、微量試料による測定が可能であり、また溶血による誤差の少ない方法がとくに望まれることは言をまたないが、同時に手技が簡易なことも重要な要因となる。われわれは Alkaline Azobilirubin Blue 法 (A.A.B. 法) を開発し、これらの目的に適當するものと考えている。

#### 2) 研究方法

i) Dade 社製 standard ビリルビンを用い、臨床上診断的意義の大きい濃度において測定に必要な血清量の下限を求めた。

ii) Evelyn-Malloy 法, Jendrassik-Cleghorn 法, 分光光度法など、通常用いられている測定法と比較し、と

くに Hb contamination による影響を中心に検討した。

#### 3) 研究成績

本法は新生児高ビリルビン血症の診断に用いて血清量 20μl で充分信頼し得る値を示し、Hb contamination に対しても安定している。かつ測定操作も比較的簡易で routine な検査法として価値が大きいと考える。

### 232. 自己採取細胞診による子宮癌集団検診成績について

(大阪成人病センター)

横山 泰, 岩田 良司

本郷 二郎, 村上 勲

1959年 Davis がいわゆるサイトピペット法を考案して以来、自己採取細胞診法が子宮癌の集団検診の方法としてとりあげられ、癌の早期発見に良好な成績をあげつつある。われわれもすでにこのピペット変法を用いて集団検診を実施し、多数の早期子宮癌患者を見出した。しかしながらこのピペット法では腔内容採取の失敗率が高く、また使用上についても種々の不便さを感じさせた。すでに発表したごとく、ゴムスポンジの着いた器具を用いるいわゆるサイトシリンダー法が子宮癌の集団検診に際してさらに簡便、確実な方法であることを知り、昭和42年以降、このサイトシリンダー法による集団検診を実施している。すでに得られた成績は以下の通りである。すなわち、昭和42年4月より昭和44年3月までの被検者総数は1932名で、この内1097名は前年にピペット法により一度検診を受けている。新しく検診された835名より、上皮内癌3例を含む子宮頸癌6例 (0.71%), 異型上皮7例 (0.83%) を見出した。また、再検者グループ1097名の中より上皮内癌1例、異型上皮3例を見出した。腔内容採取失敗のための再検査を必要としたものはわずかに14例 (0.7%) であり、サイトピペット法 (反復2回法) による採取失敗率2%をはるかに下回つた。また、異型上皮の発見頻度はピペット法による発見率 (1549例中3例, 0.2%) よりもかなり高い成績を得た。さらに、一年前にピペット法で検診を受けて異常所見を認めなかつたが、今回サイトシリンダー法で再検診を行なつてわずかに1例の上皮内癌であるが、異常所見を検出し得たことも、サイトシリンダー法の有利さを物語るものであるとともに集団検診の反復実施という重大問題をも示唆するものである。

### 233. 子宮頸癌患者の上部尿路異常に関する研究 (点滴静注尿路造影法の応用)

(岡山大) 橋本 清, 新 太喜治